

論文審査の結果の要旨

氏名 黄こう 智暉ちき

本論文は、曲亭馬琴(1767～1848)の小説作品における史論的特質を、勸善懲惡の理念および易学的思考を中心としつつ、明らかにしたものである。本書の構成は、第一部「勸善懲惡と史論」に「馬琴読本における春秋の筆法」「馬琴読本における「雪恨」の理念」「馬琴読本における因果律の機能」「『金毘羅船利生纜』の翻案方法」の四章を、第二部「易学と史論」に「馬琴読本における易学的趣向」「馬琴読本と五徳終始説」「馬琴読本における予兆・卜占」「馬琴の吉凶観」「馬琴読本における変易論と勸善懲惡の交渉」の五章をそれぞれ収め、全部で九章から成る。

第一部は、馬琴小説の勸善懲惡の理念の根拠が、『春秋左氏伝』『女仙外史』や清の李笠翁・毛声山らの戯曲観にあることを詳細な作品分析によって確定し、『開卷驚奇侠客伝』『南総里見八犬伝』『椿説弓張月』『金毘羅船利生纜』等々の人物造型や人物批評に、その理念が適用されていることを明らかにする。また、『新累解脱物語』『美濃旧衣八丈綺談』において確立した因果応報・輪廻転生による構成法が、勸善懲惡の理念とあいまって、『南総里見八犬伝』や『開卷驚奇侠客伝』等のいわゆる史伝物読本に見られる馬琴の史論へと展開することを指摘する。

第二部は、和漢の多くの史書がそうであるように、馬琴小説にも易学の影響が強いことを指摘し、『松染情史秋七草』における戦乱の予兆としての怪異現象や『近世説美少年録』における大内家の没落等に、易学的な思考が極めて強く出ていることを明らかにする。また、『墨田川梅柳新書』等の前期の作品にも五行生剋の原理が見られるが、『開卷驚奇侠客伝』に至り、南北朝の対立を描くに際して、中国における王朝交替の易学的な解釈原理である五徳終始説を援用していることを詳細に論じて、この作品に、馬琴の易学的史観の達成を見ている。さらに、こうした馬琴の易学的思考は実生活上の判断にも及ぶこと、また勸善懲惡の理念と易学的思考が馬琴の中で一つになる契機が、『易経』の積善余慶・積惡余殃の理にあることを明らかにする。

従来の馬琴小説の研究は、『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』等の史伝物読本の作品論を中心に進んできたが、それらは個別の作の典拠や構想に関するものがほとんどで、読本全体にわたる馬琴作品の基本構造を明らかにしたものはなかった。本論文は、史伝物のみならず、馬琴の前期から晩年にいたる膨大な読本を精読した上で、読本諸作の全体を貫くものとして馬琴特有の史論(歴史観)があり、その史論が勸善懲惡の理念と易学的思考によって形成されていることを初めて明らかにしたところが、きわめて高く評価される。儒教的な理念である勸善懲惡と仏教的な理念である因果応報の関係など、今後さらなる検討を必要とする問題もあるが、その問題点も本論文によって新たに浮上したものであり、本論文の意義の大きさを裏付けるものである。よって、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。